

平成元年一月三十一日 「講演概要・感想」

「スポーツと人生」

南寮早大二年 山口 達人

最初に前川塾長からの挨拶があり、教養講座柔道部の中島師範による紹介に続いて山下先生の講演は始まった。以下がその概要である。

——生れた時こそは普通であったがその体格は、はずば抜けていて、肥満気味の体を持て余してよく級友を泣かし、とうとう登校拒否者まで出してしまったのを親がひどく心配し、家族にはしていた人はいなかったが柔道をやらしてみたらどうかというのがその始まり。中学時代には漠然と、オリンピックに対する夢を抱くようにもなっていた。

現役時代には三回のオリンピック出場のチャンスがあったが、ものにできたのは最後までなかったロスオリンピック。しかしそのオリンピックの二回戦で怪我をしてしまった。先手を取られたりして焦りもしたが、何とか優勝することができ、友情も芽生え、自分は世界一幸せな男ではないかと思った。「それらはひとえに己の

性格や素質にも体にも良い師にも、むろん絶え間ない練習や同僚の多くの協力、それらすべてがあったお陰なのであった。」

オリンピックでの成功はともかく、手痛い敗北もあった。

——安易に勝ちを望んでその結果、全力を出し切らずに判定で敗れ、その悔しさから出て来た教訓をずっとずっと忘れずにいたからこそ、それ以後現役引退まで敗れずに済み、また常に勝利においても反省をしつづけたからこそ、うまく行ったのである。出来事をなるべく自分に都合の良い様に解釈し、リラククスし精神を集中させること、気迫だけでは絶対に負けをとらないこと、それらが「上手い」と現役時代には言われたものであった。

講演の最後に、自分がまだほんとに悪ガキだった小学時代の級友達の手による表彰状の話があり、金メダル以降のこれからの夢について、山下プロレス入りの噂の真相とプロ格闘技の在り方に対する質問、柔道での賞金の是非、オ

東海大助教授 山下泰裕先生

リンピック不参加について、息子に柔道をやらせるか否か、ロスオリンピック決勝のラッシュワイン選手との対戦の真相について、それぞれ質疑応答があり、塾長の挨拶で講演会はしめくくられた。

感想としては、やはり『さすが』の一言に尽きる。——教訓的に述べるのでもなく、偉ぶるのでもなく、質問一つ一つにことば丁寧な答えられた先生の姿は、あるべきスポーツとスポーツマンそのもの……などと言ったらしらすらしいだろうか？ しかしトップをきわめたい顔、がとても僕の印象に残っている。現場の、実際のところの話もたくさん聞けて、とても面白い講演であった。

質疑応答

山下 泰裕先生

出席 西寮 香山・浮海・橋本・藤沢

南寮 荒木・梶原・梅田

北寮 槌谷

中嶋師範・大北・船越

●浮海 最近、ニュースでの相撲の占める割合が少なくなつたと思います。日本の伝統的な文化が軽視される傾向は嘆かわしいものです。

●中嶋 それは柔道にもいえることです。

●大北 私の知っている柔道青年で、高校でレギュラーになれなかつたために学校に行かなくなつたものがいます。

●船越 スポーツ特待で入学した生徒が、例えば怪我などのためにそのスポーツを取り上げられたとき、何が残るのでしょうか。ほんとかわいそうですね。

●山下 それは、指導者がスポーツが全てのように言うからです。選手にも、競技生活以外の生活があるわけでしょう。指導者は選手の人を全体を考えてあげなくてはなりません。そういう意味ではたいへんな仕事です。

●橋本 私は将来政治家になりたいと思つています。最近、特に二つのことを考えています。一つは、リクルート疑惑など腐敗を生む日本の政治構造を根本から変えていかなくてはならないということ。二つ目は、先ほど浮海さんが言われたように日本が根無し草的であること。そして三つ目は、地方をもっと活性化していかなくてはならないということです。

●山下 がんばってください。

●植谷 モスクワオリンピックで日本が参加をボイコットしたとき、山下さんは日本柔道に失望してもうやめてしまおうとか、そんなことを思つたことはありませんか。

●山下 やめようと思つたことはありません。しかし、あのボイコットには大きな失望と怒りを感じました。実は私は、幸か不幸か、ボイコット決定の翌日に足の腓骨を骨折してまったく動けなくなりました。その日の稽古が終つたら思いきりヤケ酒を飲んでやろうなんて思つていたのが、酒も飲めないわけです。その時は思つたんですね。これは、神様が私に休養を与えてくれたんだと、そう考えることにしたわけです。それまで私は、体格にも恵まれ、素質にも恵まれ、何もかもうまくいっていたのが、これは初めての挫折でした。そういった意味も含めて、あのモスクワボイコットは私にとって非常に大きな意味をもっています。初めて政治に関心をもつようになりました。スポーツは政治抜きに考えられません。日本の柔道を良くするためには、またスポーツ全体のためにも、これからいろんな勉強をしないかなくてはいけないと思ひましたね。ただ、私がこういふふうに肯定的に考えられるのは、ロサンゼルスで再び機会を与えられたからです。モスクワのチャンスを失つたまま引退してしまつた仲間はいくらふうには考えていません。私も、もし口

サンゼルスがなかったら違つたふうな感じ方をしていると思ひます。

●浮海 あの、和敬塾では五月に塾祭というものがありまして、わたくし文化部長を担当させて頂きますので、よろしかつたら来てください。

●香山 僕は先生と同じ熊本県出身です。先生にとつての熊本県とは何なのか、お聞かせください。

●山下 熊本県は武道が盛んなところです。それで自分も柔道をやるようになったわけですよ。と言うのは、自分は小さい頃たいへんな暴れん坊だったので、親は柔道をやれば素直でおとなしい子になるのではないかと思つて私を道場に連れていったんですね。熊本では武道がこのような「道」と考えられていて、これが自分の人間形成に大きな役割を果たしたと思つています。

●山下 皆さんはこの寮に入つて、どういふところが一番よかつたと思ひますか。

●荒木 やつぱり一つの大学でなくつていろんな大学の人間がいますから、今風に言えば、いろんな情報が入るといふことです。同じ釜の飯を食ふことで、例えば自分が結婚するとき結婚式に呼べる仲間がたくさんできます。心を打ち明けて話せる友達ができるんですね。それに、下剋上もあります。一年生が上級生にかみついたりしますから、自分たち上級生もしつ

りしてなければ、先輩として恥ずかしくない行動をしていなければならない、緊張感もありますね。

●山下 いろんな大学の人がいるというのはいいことですね。スポーツ会では、自分の育ってきた部や大学の方針にどっぷり染まりやすいんです。でも、その方針や精神というのはあくまでも自分が経験したのに過ぎません。私もこれからは他の大学や違ったところからも広く学んでいきたいと思えますね。

感想「スポーツと人生」

塾友三八年西卒 産経新聞 西尾 忠興

いい話だった。胸にジーンときて、そして大きな拍手が湧いた。

平成元年のトップバッター、山下泰裕氏（東海大助教授）の講演「スポーツと人生」である。一月三十一日夜、久しぶりに和敬塾で、「文化」を堪能した。

ロス五輪柔道の金メダリスト、「世界のヤマシタ」が、童顔でソフトに、ささやくように静かに話していた。

小さいころ、ものすごい腕白で、同級生をいじめて両親を困らせたこと、いい恩師とすばら

しい身体と激しい練習で、ついに念願の世界一になったこと。

超人的な連勝記録を作った彼ですら、人並み以上に緊張し、「国内で敗ければ、山下敗れるだが、海外での国際大会でやられた時の報道は、日本ジュードウ敗れる、となり、ものすごいプレッシャーを感じて、試合会場から逃げ出した」と思ったこともある。でも俺が負ける筈がないと自分を信じた。海外には身体の大きな選手が多く、二百十五ポンド、百七十六ポンドの選手と対戦したこともある。この時は、体力では負けても気迫、執念、闘志だけは絶対負けたくないと思い、試合中は相手がデカイと感じたことはない。自分自身を信じ、向かって、向かって、向かってゆく——と、山下ならぬ、常に山の上をめざした話が、とても感動的だった。

ロス五輪では足のケガを克服して、念願の優勝を果たしたが、地元・熊本では小学校時代の同窓生が祝ってくれた。今も自分の部屋に飾ってある一枚の表彰状には、こう書いてあるそうだ。

「あなたは小学校時代に我々に多大なる迷惑を及ぼした。しかし、足のケガにもめげずロス五輪で優勝したことは、小学校時代の悪事を補って余りある。我らがヤツちゃんに敬意を払います」と。会場を笑わせて、シュンとさせたあと、彼はこう結んだ。

「六十歳過ぎたら、私と闘った外国選手の国を柔道着をかついで、女房と二人で回れたらいいな、というのが夢です」。

いいぞ、世界のヤツちゃん、サマになるぞ、と応援したくなった。

まさにスポーツに国境なしを地で行った、すばらしきかな人生であり、本当に心の温まる講演だった。

さて、長々とヤマシタの話を紹介したが、こない話はない。和敬塾の塾生の特権である。

学生はまだ半人前である。社会へ出ても簡単には、一人前にはなれない。しかし、和敬塾の講演会の講師は、みな超一人前ばかりなのである。人とのふれ合いを大切にし、自分の信念を貫き、その道を極めた人ばかりである。

和敬塾の講演会は、開塾直後の昭和三十三年四月にスタートした。第一回は塾の資料によると、「オリエント史について」（三笠宮殿下）で、何とこの年は二十九回、十月に六回、十一月は七回。以下回数は減少しているが、それでもこの三十二年間で「ヤマシタ」まで、実に四百四十回という、日本に、いや世界に誇るべき超ロングラン・イベントなのである。

いやはや、一口に四百四十回というが、これは実に変なことだ。これはあまり世間に知られていないが、こんなすばらしい催事がどこに

あるだろうか。これが続けてこられた和敬塾の故前川喜作塾長をはじめ、現在の幹部の方々のご苦勞に最大の敬意を表したいと思う。

資料からも少し紹介したい。その時々の塾生に感銘を与えた各界のトップは、四百人以上(ダブリの人もいるので)いるわけだが、以下、塾生とOBの参考のために、主な人をあげてみると――。(肩書は当時)。

「日本魂という言葉について」(谷川徹三・法政大教授、三十二年)、「良識と勇氣」(池田潔・慶応大教授、同)、「ロケットと人工衛星」(糸川英夫・東大生産研究所、同)、「自然と人生」(武者小路実篤・作家、同)、「文学のあけぼの―アイヌの叙情詩・ユーカラについて」(金田一京助・学士院会員、同)、「柔道と私」(三船久蔵・講堂館十段、同)。

「日中親善について」(吳清源・囲碁九段、三十七年)、「私の来た道」(森繁久弥・俳優、三十七年)、「物の考え方」(E・O・ライシヤワー・駐日アメリカ大使、同)、「ソ連・欧州を訪ねて」(前川喜作・塾理事、同)、「人生観について」(田中角栄・大蔵大臣、三十八年)、「科学者と非人間」(湯川秀樹・京大教授、ノーベル賞受賞者、同)、「大隈老侯を語る」(松村謙三・衆議院議員、同)。

「日本の将来と英語」(松本享・NHK英会話講師、四十一年)、「現代と青年」(細川隆元・

政治評論家、同)、「コンピュータの話」(渡辺茂・東大教授、四十二年)、「現代の風潮について」(福田恒存・文芸評論家、四十四年)、「私たちと音楽」(黛敏郎、同)、「都市再開発について」(江戸英雄、三井不動産社長、四十六年)、「勝負と人生」(升田幸三・日本将棋連盟九段、四十六年)。

「朝のこない夜はない」(扇谷正造・評論家、四十七年)、「日本の苦惱」(猪木正道・防衛大学校長、四十九年)、「人間達の魅力」(城山三郎・作家、五十一年)、「道にのって勝つ」(川上哲治・NHKプロ野球解説者、五十二年)、「一九八〇年代、日本の進路」(加藤寛・慶応大教授、五十四年)、「契約の歴史としての旧約聖書」(山本七平・山本書店店主、同)、「私のジャーナリストとしての視点」(立花隆・ジャーナリスト、五十五年)、「日本経済の進むべき道」(堺屋太一・評論家、同)。

「世界における日本の責任」(渡辺武・日米欧委員会日本委員長、五十六年)、「人生について」(中曾根康弘・首相、五十八年)、「二十世紀を生きる若者へ」(広中平祐・ハーバード大、京大教授、五十九年)、「日本の心」(高田好胤・薬師寺管長、六十年)、「二十一世紀における青年の役割」(井脇ノブ子・国際海洋学園校長、六十一年)、「日米関係その歴史と展望」(マイク・J・マンズフィールド・駐日アメリカ大使、

六十二年)、「世界の中の日本」(木村尚三郎・東大教授、六十三年)。

ざっと軌跡をたどると、以上の通りだが、まさにキラ星の如く、人生をすばらしく生きぬいた人ばかり。タイトルをみているだけでも、人間豊かになってくるのではないか。至言、名言、指針が山のように放出されたのである。どんな人も必ず一つは、心に残る話があったに違いない。

ここに登場した人たちは、塾生に「人生いかに生きるか、社会、人間への洞察をいかに養うか」を温かく説いただろう。先述したように、学生はまだ半人前なのである。これから社会へ出て、どんな仕事をするか決まっていなくても多いかもしれない。

和敬塾のよき、すばらしきは、社会へ出て、年輪を経ることに分かってくる。和敬塾時代、学生時代は、強い信念をつくるどころ、心身鍛練、ケイ古の場である。講演者はみな信念の強い人ばかりである。どんな道へ進むにも、きつと役に立つに違いない。どんな人の話も、必ずメモをとって聞いてほしい。そして、理事者側に「あの人の話が聞きたい」と、どんどん注文をつけてほしい。

どん欲に「世界」「日本」「人生」を吸収してほしい。社会へ出て、荒波、荒ワザにもまれ苦しい時も、一本背負いや、ともえ投げが可能に

なるのだから……。

最後に次の言葉を紹介させていただいて、この稿を終えたいと思う。

最近みたアメリカの古い名画「スペンサーの山」(名優ヘンリー・フォンダ主演)。

片いなかで、子沢山で苦しい生活。ところが、高校を卒業する長男が首席となり、どうしても大学へ行きたいが、おカネがない。結局は、石工の父親が兄弟と一緒に建てようと思っていた長年の夢、山の上の家をあきらめて学資金をねん出して息子を送り出す。

この時、高校の恩師が長男を励ますのだ。こんな風に……。

「信念をもって進む人には、全世界が道を譲る」。

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。